末摘花の人物造形意図

阿部　絵里香

故常陸の宮女、通称・末摘花は、「末摘花」「葵」「蓬生」「玉鬘」「初音」「行幸」「若菜（上）」の七巻で登場する人物である。そして、それらのうち「末摘花」「蓬生」で女主人公役に位置する。『源氏物語』全五十四帖中二帖で女主人公として扱われるのは、全体比率から見ても決して少ないものではない。ところが、女主人公として登場し、しかも、主人公と契りを結んだ女性であるわりに、末摘花に対する扱いは、『源氏物語』全体から見ると極めて脇役的であると言わざるを得ない。脇役的に扱われていながら、少なくはない巻数が、末摘花のために費やされているのは何故なのであろうか。

主人公が現れ女主人公の窮地を救ってくれる、というおとぎ話のような思いが適えられるのは、それこそ物語の醍醐味でもあるように思われる。

しかし、それだけのために末摘花は『源氏物語』に登場しているのではないだろう。では、末摘花という人物は何のために『源氏物語』に配されたのであろうか。むろん、彼女に与えられている役割が、滑稽さや愚かしさを強調することにあるのは否めない。だが、本論ではあえてそれだけではない面がないのかを考えてみたいのである。

一

作り物語における女主人公像には、あえて型という言い方を用いるのならば、一つの型のようなものが存在しているといえる。それは、眉目秀麗で才気ある人物として描かれるということである。

たとえば『竹取物語』の女主人公・かぐや姫は、世にないほどの美女として描かれている。『落窪物語』の落窪の君も、『宇津保物語』のあて宮も美女として描かれている。なるほど女主人公に該当する人物達は皆、美女である。

そして、彼女達はそれぞれに才能も豊かな女性としても描

かれている。四人の貴公子に課題を出して試した、かぐや姫は言うまでも無く、落窪の君は裁縫の技術が、あて宮は琴の才がある人物として描かれているのである。

では、末摘花の場合はどうであったのだろうか。

まず、容姿に関しては、

居丈の高う、を背長に見え給ふに、「されば よ」と、胸つぶれぬ。うちつぎて、「あな、かたは」と見ゆる物は、御鼻なりけり。ふと、目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて、色づきたること、ことの外に、うたてあり。色は、雪はづかしく白うて、真青に、額づき、こよなうはれたに、なほ、下がちなる面やうは、大方、おどろ〳〵しう、長きなるべし。痩せ給へる事、いとほしげにさらぼひて、肩の程など、痛げなるまで、衣の上まで見ゆ。（中略）頭つき、髪のかゝりばしも、「美しげにめでたし」とおもひ聞ゆる人〳〵にも、をさ〳〵劣るまじう、袿の裾にたまりて、ひかれたるほど、「一尺ばかり余りたらむ」と見ゆ。（末摘花）

と、その細部に渡って克明に描かれるくらいの醜女である。他の物語において、醜女の記述が極端に少ないことと比べて考えて見ても、この分量は驚くべきものである。

また、

かの空蝉の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりし容貌ざまなれども、もてなしに隠されて口惜しうはあらざりきかし、劣るべきほどの人なりやは、げに品にもよらぬわざなりけり、心ばせのなだらかにねたげなりしを、負けてやみにしかな、とものをりごとには思し出づ。（末摘花）

と、同じ醜女でも空蝉は「心ばせ」が「なだらかにねたげ」であったのに対し、末摘花は「心ばせ」も今ひとつなのである。

末摘花は琴という珍しい楽器を弾ける女性として描かれてはいるが、それとても名手というわけではない。楽才もなく、「心ばせ」も今ひとつな彼女は才気があるとは言えないだろう。

さらに末摘花の場合経済的にも困窮している。屋敷は「狐のすみか」にもなってしまい、

……前の前栽の雪を見たまふ。踏みあけたる跡もなく、はる〴〵と荒れわたりて、いみじうさびしげなるに（中略）御車よせたる中門の、いといたう、ゆがみよろぼいて、夜目にこそしるきながらも、よろづ隠ろへたる事多かりけれ……（末摘花）

というような感じで、更に「蓬生」の頃には

……浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は、軒を争ひて生ひのぼる。葎は、西・東の御門を閉ぢこめたるぞ、たのもしけれど、崩れがちなる垣を、馬・牛などの踏みな

らしたる、道にて、春・夏になれば、はなち飼ふ総角の心さへぞ、めざましき。（蓬生）

というような、荒れっぷりのである。当然、「末摘花」から「蓬生」までの間に経済状態が好転したとは思えず、むしろ零落していったと見るべきである。

これらのことから、末摘花という女性は、美貌も才気も資産もない女主人公といえる。

『源氏物語』以降の物語においても、末摘花のような女性は登場しない。『浜松中納言物語』の吉野の姫・唐后・尼姫君、『狭衣物語』の源氏の宮、『寝覚物語』の寝覚の君といった女主人公達は皆、そのいずれもが美人で教養ある人物として描かれているのである。

このことから、末摘花という女性は、「物語の女主人公は、美貌と才気を持った女性である」という型から外れる、物語上空前絶後の女主人公であるということができる。

ちなみに醜女は『源氏物語』より前の作品ではどのような形で登場していたのだろうか。

醜女の記述は、意外と少なくしかも具体性に乏しい。かろうじて、『落窪物語』の継母の北の方などが、「うちふくれて、いとをこがまし」と描かれているくらいである。

そして、『落窪物語』を見る限りにおいては、醜女は女主人公をいじめる、いわば敵役として描かれている。では、末摘花も醜女であるがゆえに、他の女達の敵役という描かれ方になるのだろうか。

末摘花は、『源氏物語』に登場する、光源氏と関係のあったどの女性に対しても、敵役足り得ない。むしろ同情されるべき女性として、描かれている。この点から見ても、末摘花は、醜女であるから敵役になるという枠にも入りきらない女性である。

二

では何のために従来の物語の枠に入りきらない女性が光源氏に配されたのだろうか。

末摘花が光源氏の相手役として配された事に関して、記紀的な発想があるという説もある。

鈴木日出男氏[注一]は、

『源氏物語』の底部にはしばしば、記紀の話のような古い伝承が明滅している。光源氏が右のように、夕顔という美女との邂逅と喪失、さらに末摘花という醜女との出逢いに遭わねばならない、その物語の必然的な脈絡にも、木花之佐久夜毘売と石長比売との神話が作用しているように思われる。

と述べている。また、壷内美佳氏[注二]は、

古くから、醜怪な顔には魔除けの霊能があると信じられてきた。（中略）あれほどまでに醜い女を光源氏が捨てなかったのは、単に愛情や同情や責任感だけではなく、

むしろ醜女の霊力を信じ、またはそれを恐れていたからではなかったか。あるいは源氏は末摘花の中に、霊性を感じたのではなかったか。

と述べている。

確かに古代神話的な意味で男主人公に、醜女が配されるというのはありえないことではないのかもしれない。だが、『源氏物語』においてその役割を担っているのが末摘花であるとは言い難いのではなかろうか。

末摘花も醜女ではあるが、光源氏の周囲には、「かの、空蝉のうち解けたりし、宵の側目は、いと、悪かりしかたちざまなれど」と末摘花と比較されて評される空蝉や、「かかる御なからひに、いかで、ひむがしの御方、さるものの数にて、たち並び給へらむ、たとしへなかりけりや。あな、いとほし」（野分）と義理の息子夕顔に言われてしまう花散里といった醜女が配されているからである。

古代神話的に考えれば、醜女は男主人公に霊力を与える。だが、醜さの度合いが高ければ霊力が高いというものではないであろうし、男主人公に配される醜女の人数が多ければ良いというものでもないであろう。室伏信助氏[注三]が

しかし、だからといって光源氏にとって末摘花は守り神であり醜貌ながら、いや醜貌なるがゆえにこれを手放さず、斎き崇めることが取りも直さず光源氏の将来の栄華を約束するといった読みは、なかなかそのままでは物語の文脈に馴染んでこない。

と述べるように、末摘花が醜女であるということが、醜女の持つ霊力を男主人公に与えるといった意味では、関係がないと思われる。

また、笑われる存在としての役割りを担っているという説もある。

『源氏物語』において末摘花について語られている巻は前述したとおり、「末摘花」「葵」「蓬生」「玉鬘」「初音」「行幸」「若菜（上）」の七巻である。

そのうち「葵」では、末摘花は「かの、十六夜のさやかなりし、秋のことなど、さらぬも」と葵上の弔問に訪れた頭中将との会話の中で、思い出話の一つとして登場するだけである。

また、「若菜（上）」では、「ひんがしの院に物する常陸の君の、日ごろ患ひて、久しくなりにけるを、物騒がしきまぎれに、訪はねば、いとほしくてなん。」と朧月夜に会う口実の中に登場するだけである。

このような四方山話的に扱われる以外で、実際に物語の場面に末摘花本人の言動が登場するのは、「玉鬘」「初音」「行幸」「末摘花」「蓬生」の五巻である。

このうち「末摘花」「蓬生」の二巻は、末摘花が女主人公として登場する巻である。残る「玉鬘」「初音」「行幸」の三

巻には脇役のような立場で登場するのであるが、その描かれ方は、詠んだ歌が古風過ぎて失笑を買うとか、衣配りの時の着物が似合わないとか、贈り物をすべき立場ではないのに、贈り物をして光源氏の顔を赤らめさせるとかいった、非常識な言動で光源氏を呆然とさせるという、末摘花の滑稽さと愚かさを際立たせたものである。

これらのことから考えてみても、末摘花がその容姿や言動から読者の笑いを得る存在としての役目を担っているということに、否はないであろう。

だがここにはもう一つの笑いを得る存在を内包している。笑われる存在である末摘花と契りを結んだ光源氏もまた、笑われる存在なのである。野村精一氏(注四)は、

大体末摘花のような女は光源氏にふさわしくない筈だ。美男の貴公子がそうした女とも知らずに、烈しい執心の結果、やっと得たものは、赤鼻の女だった—こういう事はまさに珍談であり、笑い話なのである。だからここで笑われているのは末摘花だけなのではない。こういう女と交渉した「名のみことごとし」い男＝光源氏もそうなのである、だから、末摘花巻の構成はあくまでも光源氏の失敗譚として組立てられているのだ。

と述べている。超人的に描かれている光源氏に末摘花を配し恋愛失敗譚を描くことにより、光源氏の人間像に更なる深みを与えていることは否めない。

もちろん、末摘花の役割のひとつには「帚木」で語られた雨夜の品定めの内密の成就にあるということも間違いないだろう。

さて、「世にあり」と、人に知られず、寂しくあばれたらん人葎の門に、思ひの外にうたげならん人の閉ぢられたらむこそ、限りなく珍しくは、おぼえめ。「いかではた、かかりけん」と思ふより違へることなん、あやしく心とまるわざなる。(帚木)

「帚木」の中でこう語られ、中の品の女である空蝉・夕顔をめぐる物語「空蝉」「夕顔」に続き、荒れた屋敷に住む「思ひの外なる」女として、読者に期待を持たせる役目を末摘花が持っているというのは間違いあるまい。もっとも、光源氏が苦心の末に手に入れた女は、びっくりする程醜女であったのだが。

これらの末摘花の物語における役割には一応納得できても、末摘花でなければならない理由にはなりにくいとも思える。前述したとおり醜女は他にも登場しているからだ。むろん、これらのことに「たら・れば」は禁物である。だが、末摘花が従来ある型の女主人公像ではないながらも、今までの女主人公像のように主人公の寵愛を勝ち得るためには、やはり他の女君にはない特質があるように思われるのである。

三

そこでまず、末摘花を親子の関係で考えてみたい。

末摘花の父常陸宮は「末摘花」の記載により、誰の兄弟なのかは不明であるが、親王である。母親は登場してこないが、「蓬生」に叔母大弐が「やむごとなき筋」の出であるとあり、この大弐と末摘花の母は「はらから」であるから、末摘花の母も「やむごとなき筋」の出自であると分かる。末摘花の母に関しては、人々の口の端に上がらないことを考えると、末摘花が物心つくまえに他界したと見るべきであろう。

また、乳母子の侍従は登場するが、その母乳母のことは多く語られず、登場もしないことにも注意したい。おそらく乳母も早くに他界したか、他家に仕えるかして、末摘花の養育には深く係わっていないと考えられる。従って母親にも乳母にも縁の薄い末摘花は女性にではなく、父親に養育された女であるといえる。

この父宮は、ことに和歌に力を入れた人と考えられる。

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも読人をも、あらはし、心得たるこそ、見所もありけれ、うるはしき紙屋紙・陸奥紙などのふくだめるに、古ことどもの、目馴れたるなどは、いと、すさまじげなるを、せめてながめ給ふ折は、引きひろげ給ふ。（蓬生）

「よろづの草子・歌枕、よう案内知り、見つくして、その中の言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、つよく変らざるべけれ。常陸の親王の書おき給へりける、紙屋紙の草子こそ、『見よ』とて、おこせ給へりしか。和歌の髄脳、いと所せく、病、さるべき心多かりしかば、もとより、おくれたる方の、いとど、なかなか、動きすべくも見えざりしに、むつかしうて、かへしき。……」（玉鬘）

とあるように、和歌に関しては髄脳まで残している。末摘花の歌が「奥寄り」であり、「今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬ」ことを考えてみても、末摘花はこの父宮に和歌の手ほどきを受けたと考えるのが自然である。

また、末摘花が弾ける楽器である琴も

「……琴をぞ、「懐しき語らい人」と思える」（中略）「我に聞かせよ。「父親王の、さやうの方に、いと由づきて物し給ひければ、おしなべての手遣ひにはあらじ」と思ふ」と、語らひ給ふ。（末摘花）

とあることからみて、父宮から手ほどきを受けたものと考えられる。

「蓬生」において庭木を譲って欲しいと言われたときも、調度を他人に譲ってはどうかと言われたときも、末摘花が断わる理由に亡き父宮を根拠にしていることからも、この親子の結びつきはかなり強いものであると考えられる。

末摘花は父宮の影響を色濃く受けており、世間の感覚から

ずれた女性である。彼女が何よりも大切にしているのは、父親の教えであり、宮家としてのプライドでもある。その末摘花の姿勢は終始一貫しており、巻を変えても変化があるようには思えない。そんな彼女からは、彼女と同じものにこだわったであろう父宮が透けて見える。父宮自身は一度も『源氏物語』本文に登場しないことを考慮しても、女君の背後にここまで父親が透けて見えるのは珍しいと言わざるを得ない。父の影響を強く受ける末摘花からはある意味、父親を求める末摘花の姿を見ることができる。

光源氏は、紫の上、藤壺を辿って、最終的には亡き桐壺更衣の姿をいつも求めている。末摘花が亡き父親を求める一面を持っているように、光源氏は亡き母親を追い求めている。末摘花の父親を求める姿と光源氏の母親を求める姿は対比して描かれていると考えられるのではないだろうか。

また別の角度、つまり、紫の上の育ての父という方向から光源氏を見る場合、紫の上を通して、父親の女への影響差というものを見ることもできよう。

末摘花には、彼女というフィルターを通して、他の登場人物との対比して考えさせる面も持っているのではなかろうか。

四

対比される存在という他に末摘花に与えられた役割はないのであろうか。

光源氏は、「蓬生」の中で、末摘花に関して、こう述べている。

いみじうあはれに、「かゝる繁きなかに、なに心地して、過ぐし給ふらむ。今まで、訪はざりけるよ」と、わが御心の情なさも、思し知らる。「いかゞすべき。かゝる忍び歩きも、かたかるべきを、かゝるついでならでは、えたちよらじ。かはらぬありさまならば、「げに、さこそはあらめ」と、推し量らるゝ、人のさまになむ。」とは、のたまひながら、ふと入り給はむこと、なほ、つゝましう思さる。（中略）ひたぶるに物つつみしたるけはひの、さすがに、貴やかなるも、心にくく思されて、『さるかたにて忘れじ』と、心ぐるしく思ひしを、年頃、さま〴〵の物思ひに、ほれ〴〵しくて、へだてつる程、『つらし』と、おもはれるらん」と、いとほしく思す。かの花散里も、あざやかに、今めかしうなどは、花やぎ給はぬ所にて、御目移し、こよなからぬに、咎、多う隠れにけり。（蓬生）

実直にただ、光源氏を待ちつづけていた、そのことだけで花散里と比較しても差異がないから、末摘花の「咎、多う隠れ」るというのである。つまり、末摘花の一途な人柄が、他の難点を補うというのだ。

『無名草子』は、末摘花に対して

大弐の誘ふにも心強く靡かで、死にかへり、昔ながら

の住ひ改めずつひに待ちつけて、『深き蓬のもとの心を』とて分け入り給ふを見るほどは、誰よりもめでたくぞおぼゆる。みめよりはじめて何事もなのめならむ人のためには、さばかりのことのいみじかるきにも侍らず、その人がらには、仏にならむよりもありがたき宿世には侍らずや。

と評している。やはり、末摘花はその人柄がまれなほど、素晴らしいというのである。

光源氏の「蓬生」での末摘花に対する意見と、『無名草子』の記述と考え合わせるならば、紫式部が新たな女主人公像として末摘花に与えた条件とは、愚直なまでの光源氏への一途さということができるであろう。

末摘花は、「玉鬘」「初音」「行幸」で、歌を皮肉られたり、場違いな贈り物に光源氏を唖然とさせたりはした。だがそれは、彼女の才覚のなさを皮肉るものであり、彼女の愚直なまでの純粋で一途な性質を皮肉るものではない。度々に渡り、物語中で失笑を買う末摘花ではあるが、結果的にみれば、彼女は光源氏の庇護を、受けられる立場になる。

やはり、愚直なまでの純粋な一途さというものが、末摘花を、今までの物語にも、この後の物語にも登場しない、新しい女主人公たらしめた条件であるといえるであろう。

では、紫式部はなぜ、末摘花から美貌・才能といった作り物語の女主人公としての要素を奪い、新しい女主人公のあり方の美点として、愚直なまでの光源氏への一途さというものを与えることにしたのだろうか。

たとえば末摘花と同じように醜女として描かれている女性で、やはり光源氏に対して一途であった人として、花散里がいる。しかし、彼女は、夕霧の養母となり得る才覚者として描かれている。

同じように、醜女として描かれておきながら、花散里には才覚も与えられ、末摘花には、愚直なまでの純粋な一途さしか与えられなかったということは、とりもなおさず、物語において、末摘花は、とりわけその一途さを強調する必要があったと考える事ができるのではなかろうか。

紫式部は、なぜ一途さを極端に強調する女性を造形したのだろうか。それには、紫式部の考えている理想とする女性像というものが深く関わっていると思われる。

『紫式部日記』における、式部の人物評は、全てではないものの、多くは始めに容姿のことを述べ、次第に性格談へと移り変わって行くように思われる。

最終的に、人物に関する性格談は、総括するようにして、以下のように述べられている。

さまよう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどやかに、おちゐぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしくうしろやすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性の人からくせなく、かたはらのため見え

にくきさませずだになりぬば、にくうは侍るまじ。

つまり、のんびりとおちついていて、本性にくせのない、素直な人が良い人物であるというのである。

また、「箒木」の雨夜の品定めにおいて、紫式部は左馬頭の口を借りて次のように女性観を披露する。

今は、たゞ、品にもよらじ、かたちをば、更にもいはじ。いと口惜しく、ねぢけがましきおぼえだになくは、たゞ、ひとへに物まめやかに、静かなる心の趣ならんよるべをぞ、終の類み所には、思ひおくべかりける。あまりの故由、心ばせ、うち添へたらんをば、喜びに思ひ、少し後れたる方あらんも、あながちに求め加へじ。（中略）又、なのめに移ろふかたあらん人を恨みて、気色ばみ背かん、はた、をこがましからむ。心は移ろふ方ありとも、見そめし心ざし、いとほしく思はば、さる方のよすがに思ひても、ありぬべきに、さやうならんたぢろぎに、たえぬべきわざなり。すべて、よろづのこと、なだらかに、怨ずべき事をば、見知れるさまにほのめかし、恨むべからんふしをも、憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれも勝りぬべし。（箒木）

女は容姿や身分ではなく、本性の素直さであるというのである。

これらのことから紫式部が女性の美徳と考えていたのは、容姿や才気ではなく、その人の本質的な心根の良さであるということができるのではないだろうか。

人は心根が大事であると考えていたのは、紫式部だけではないようである。

清少納言は『枕草子』の中で「おほかた、心よき人の、まことにかどなからぬは、おとこも女もありがたきことなめり。」と述べている。

心根の良い人で利発な存在は、男女ともに少ないというのである、という物言いである。これは裏を返して見れば、それだけ心根の良い利発な人物が貴重だという言い方でもある。

心根の良さが人間にとって大切なものであるという考え方を物語の表面に打ち出すためには末摘花のように、それまでの型に当てはまらない女性像でそれを強調する必要があったのではないだろうか。

『源氏物語』にははっきりと分かる醜女が三人いる。空蝉・花散里・末摘花である。始めから光源氏一人を夫としたという点で考えると、花散里と末摘花には共通点がある。醜女であるという点と、光源氏の妻、あるいは他の女達に対して嫉妬もしないし、同時に嫉妬もされないという点である。共通点を持った二人ではあるが、花散里に染色や子育てといった才気が与えられていたのに対し、末摘花には一途な純粋さ以外の美徳が与えられなかった。他に強調すべき点がないことが、逆に彼女の特質を際立たせているのだろう。

登場人物ということで考えれば、他方で紫上や明石御方と

いった、従来の型に属した女達をも作り出している紫式部にとって、美に対立する立場にある末摘花の造形は、従来の作り物語に対する挑戦でもあったに違いない。

物語の女主人公の型ということで考えた場合、容姿・才気のない末摘花は女主人公足り得ない。それゆえに、この新しい女主人公像は、最も端的に紫式部の考えている理想の女性像を具象化した人物であるようにも思える。

末摘花の人物造形を通して、人間は容姿でも、才覚でもなく心根を見るべきものであるという、紫式部の考えが見えてくるようにも思われるのである。その役割の一端を末摘花が担っているとは言えないだろうか。

〈注〉

一　鈴木日出男「夕顔と末摘花―『源氏物語』の古代的構造についての断章―」　季刊「文学」　H三・春　岩波書店

二　壷内美佳「末摘花論―その〝山の神〟的性格―」大谷女子大国文・H元・三

三　室伏信助「末摘花は光源氏にとって何であったか」国文学・S五十五・五

四　野村精一『源氏物語の創造』S四十四・九・桜楓社

〈付記〉

本文引用に際しては以下の本文を使用した。

『源氏物語』岩波文庫

『紫式部日記』岩波文庫

『無名草子』新潮日本古典集成

『枕草子』新日本古典文学大系

『宇津保物語』新日本古典文学全集

『落窪物語』新潮日本古典集成

御指導頂きました小谷野純一先生に御礼申し上げます。